

山居乱信

1

僕の家は破れ家だが
窓ガラスは透明にみがいてある
山に向ふ道を通る人の姿が眺められる
「夕刊が来ましたけどお読みになりますか」
家の者が聞く
片手を振つて僕は
「もつとあとで読むことにしよう」
と答えた

2

男と女とが肩をつけあつて行く
肩をすぼめるやうにした男と
原色に近いレインコートの女と
しつかりと手を握りあつて
緊張した会話を交してゐるらしい様子
夕刊のことに気をとられて
「あれを読むのはもつとあとにしよう」
僕がさう考へて
改めて道の方を見ると
すでに彼等は窓の所を過ぎてしまつてゐた
仕方ないので身体を窓に寄せて
更に額をガラスにふれるばかりにしてのぞく
白い雲の中にまぎれて姿はない
二人のしつかりと握りあつた彼等の内側の手首だけが
小さい生き物のやうに緊張した姿で
かすかに揺れながら去つて行く

3

君の髪の毛もごま塩になつたものだ
君の髭も乱雑にのびてゐる
君の額のしわも深くなつたものだ
君が窓の外をうつむいて歩いて行くのが見える
君はどこへ行くのだらう
こちらを見ないでステツキで
時々落ち葉を突き
石をはね飛ばし
赤ら顔をして過ぎて行く

何か面白くないことでもあつたのだらうか
君も老人になつた

4

外が暗くなつて室の中に電燈がついた
つやつやしたガラス窓に僕の顔が映つた
しかし 窓の外の道が
僕にはよく見えるのだ
僕と家の者と二人がそこを歩いて行く
しばらく二人は若い男と女のやうに肩を寄せ
しつかり手を握りあひながら歩いて行く
相当遠ざかつたと思ふと
ボタンといふ音をさせて
道がカラクリのやうに元にもどされる
僕と家の者の二人の姿は元の場所にもどされる
二人はまた同じやうに歩きはじめる
何回も何回もくりかへす
ああ 彼等は闇の道を
ボタンとかへされてはまた歩く
髪も乱れ
着てゐるものをひるがへす
だんだん速く はげしく動く
これでは
僕と家の者が毀れてしまふではないか
そればかりではない
破れ家も窓ガラスも
僕と家の者の人生も カラクリの道も

5

「そろそろ晩めしにでもするか」
僕は言つた
「さつきの夕刊はどこに置いたのだらう」
家の者がそれを差し出してくれた
電燈の下で僕は拾ひ読みした
三面の一番下の死亡欄
裏罫がついて君の名前が出てゐる
たつた五行の記事だが
君の名前の正しい読み方
君の正確な年齢
長いつきあひのあひだにも僕の知らなかつたことを含めて

要領よく書いてあつた